２０２３年１１月５日 聖霊降臨後第２３主日説教　特定２６

ミカ書 3 章 5-12 節
テサロニケの信徒への手紙一 2 章 9-13、17-20 節
マタイによる福音書 23 章 1-12 節

先週は４年ぶりにバザーが開催されました。みなさま、お疲れさまでした。ミニバザーと称しておりましたが、とても盛大なバザーでした。来場された皆様も、喜んでくださったと思います。１１月１日、２日は、教区の墓地礼拝が、こちらも４年ぶりに開催されました。３日は、東京教区成立１００年周年記念礼拝が行われました。久しぶりの教区合同礼拝として恵みに満ちたひと時でした。

さて、本日は使徒書を中心に学びたいと思います。教会について改めて学ぶためです。先々週から、「テサロニケの手紙一」が使徒書です。このテサロニケの教会は、パウロが建てた教会です。そこへ宛てたこの手紙は、新約聖書の中で、最も古い文書と言われています。それゆえ、教会の最初期の状態が、間接的にわかるといえます。

本日の箇所の 9 節～13 節で、パウロは、自分たちがテサロニケでどのような宣教して、教会を設立したかを確認しています。「**きょうだいたち、あなたがたは私たちの労苦と骨折りを覚えているはずです。私たちは、誰にも負担をかけまいとして、夜も昼も働きながら、神の福音をあなたがたに宣べ伝えたのでした**」（9 節）。「私たち」とは、パウロとシルワノですが、そこにはテモテなどそのほかのパウロの同労者も含んでいるかもしれません。「**私たちは、誰にも負担をかけまいとして、夜も昼も働きながら**」とありますが、この中の「**誰にも負担をかけまいとして**」は、自分たちで働いて生活の糧を得て、信徒の人々に経済的な負担を掛けていなかったということです。なぜ、パウロはそのようなことを語るのか、それにはいくつかの理由があります。

第一に、使徒と呼ばれたイエス様から直接的な教えを受けた弟子たちは、教会がその活動を支えていたからです。それぞれのもとの仕事を離れてイエスに従ったのが使徒たちです。漁師だったペトロを考えれば、当然といえます。しかし、パウロは、「**私たちはキリストの使徒として重んじられることができたのですが**（キリストの使徒の権威）」（７節）とある通り、自分もそのような使徒のひとりだが、使徒であることを明かしするために、逆にそうしなかったと主張しているのです。経済的な事柄が目的で使徒となったとは思われたくなかったのでしょう。また、できたばかりのテサロニケの教会も、そのような経済的余裕もなかったからでしょう。

第二に、パウロがもともと律法学者であったことが関連しています。それは、多くの律法学者やファリサイ派の人々は、自分で手に職を持ち、律法以外の事柄で自分の生活を支えていたからです。パウロも職業は天幕作りだったと一般的に言われています。それゆえ、イエス様を信じるようになり、教会の使徒となった後も、その職業によって自分の生活を支えるつもりだったのでしょう。

第三として、上記の経済的な事柄以外の理由があります。それは最初期の教会の固有の神学的な事柄を背景とした、テサロニケの教会の人々の生活も関係している理由です。この手紙が書かれたときのテサロニケの教会の人々は、宣教したパウロと共に、世の終わり・キリストの再臨が非常に近いと考えていました。自分が生きている間に世界の終わり・終末が来るかもしれない、というぐらいの間隔でしょう。それゆえに、それまでどのように生活したらよいのか、それが神学的に優先的な課題であったと思われます。また、非常に近いと確信しすぎた人々の中には、怠惰な生活を送る者もいたようです。そのような中で、パウロは、「**あなたがた信者に対して、私たちがどれほど敬虔に、正しく、非難されることのないように振る舞ったかは、あなたがたが証しし、神も証ししてくださいます。**」（１テサ２：10）と語ります。ここは、宗教的側面だけではなく、日常生活に関する事柄も含んでいると思います。つまり、パウロは、テサロニケの教会の人々の生活上の模範になるようにと努めたのです。この言葉は、それは、「**私たちは、父親が子どもに対するように、あなたがた一人一人に、神にふさわしく歩むように励まし、慰め、強く勧めました**」（１テサ２：11-12）という言葉からもわかります。

パウロが、終末は近いと思いつつも、自分をキリスト者が歩むべき姿の、模範として提示しようとする理由は、特祷にある通りです。イエス様がわたしたちにとって「清い生涯の模範」に他ならないからです。パウロは、イエス様に会ったことはないと思うのですが、イエス様に従い、そのまねをすることがキリスト者であると自覚していました。そして、そうであるがゆえに、「**神は、あなたがたをご自身の国と栄光へと招いておられます**」と自信をもって、世の終わりに起こると予想される事柄について語るのでした。

17 節からは、テサロニケをもう一度訪問したいというパウロの切なる願いが書かれています。ここでは、物理的に離れているつらさを表すために、「孤児」という喩えさえ用いています。しかし、心は離れてはいないとつながりの強さを強調しています。教会はその最初の時から、物理的、人間的つながりを超えた、霊的なつながりがあるという一例です。

テサロニケの教会にあったような、切迫した終末待望は、現在の教会で強調されることはありません。しかし、終末待望がなくなったわけでもありません。それゆえ、わたしたちにとっての終末とは、わたしたちのそれぞれの命の長さがであるとも言えます。そして、それぞれの自分なりの方法で、自分の生活の中で、そして、それぞれの自分の命の限りの中で、イエス様の真似をすることが大切なのです。その点は、最初期のパウロの状態と変わりません。そして、そのような人々が霊的につながるのが、教会という存在に他ならない点も変わりません。墓前礼拝で改めて確認した事柄は、死を超えた教会のつながりでした。その結びつきは、地上のあらゆる試練や困難を乗り越える恵みと力を持ちます。その恵みと力に支えられて、これからも歩みたいと思います。